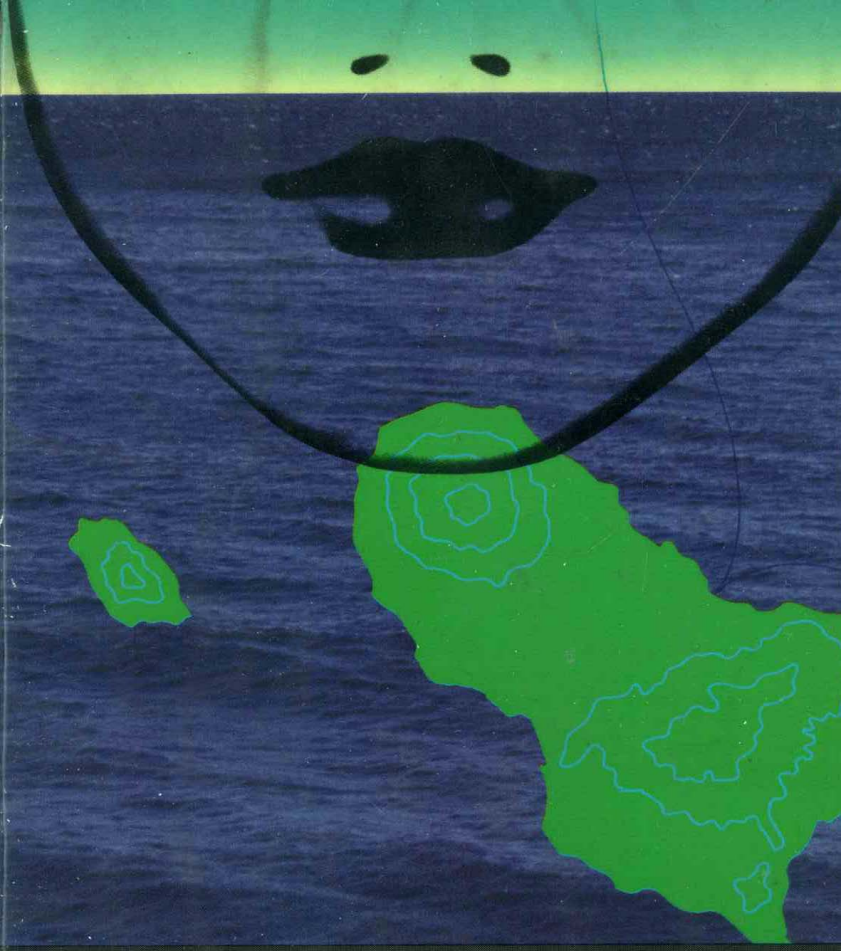

KAPPA NOVEL

長編推理小説　書下ろし

致死海流

ちし

森村誠一

致死海流

森村誠一

カッパ・ノベルス

お願い——

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。

なお、このほかに、「カッパの本」では、どんな本を読まれたでしょうか。どの本にも、一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば、幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三
（郵便番号112）
光文社　出版局

長編推理小説　**致死海流**

昭和53年6月30日　初版1刷発行
昭和53年8月10日　　5刷発行

著者　森村誠一（もりむらせいいち）
発行者　小保方宇三郎
印刷者　堀内文治郎
東京都千代田区三崎町2-18-11
堀内印刷

発行所　東京都文京区音羽2
振替 東京6-115347
株式会社 光文社
電話 東京（942）2241（代）

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。（ナショナル製本）
表紙の模様・意匠登録　116613　© Seiiti Morimura 1978

(分)0-2-93(製)02345(出)2271 (0)
Printed in Japan

[illegible]・書下ろし

致死海流

森村誠一

カッパ・ノベルス

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbo

『致死海流』目次

序章 5
漂流体 15
死出の休暇 24
死者の相宿 44
三角心中 58
フラッシュバック 79
ダミー犯人 82
フラッシュバック 87
タワーホスピタル 92
方角ちがいの密室 113
独立した殺意 148
殺意の隠れ家 166
殺人の配役 182
裏返しの遺留物 196
命拾いした恐喝(きょうかつ) 216
あとがき 228
解説……二上洋一(ふたがみひろかず) 231

イラストレーション　松田穣（まつだ みのる）

序章

A

「なあ、旅行へ行かないか」
「いいわね、お天気のいい日に、おいしいお弁当をたくさんつくっていって、あなたときれいな景色の中で食べたいわ」
「いや、そういうハイキングみたいなのじゃなくて、せめて一泊か二泊する旅行だよ」
　男の言葉に、女の表情が少し改まった。
「どうしたんだい？　休みが取れないのか」
「休みは取れるけど……」
「じゃあ問題ないだろう」
「私、なんだか恐いわ」
　女は、頬を両手で押えた。
「なにも恐がることないじゃないか」
　男は初々しい婚約者の顔を見た。
「本当は、あなたとそういう旅行をするのが恥ずかしいのよ」
　両の手で押えた頬がうすく染まっている。
「はは、そんなことだったのか。大丈夫。きみの初めてのものは、その日まで大切に保っておくよ。ぼくもけじめをはっきりとつけないまま、きみとの生活をはじめたくないんだ」
「あら、私、べつに嫌がっているわけじゃないのよ」
「わかってるよ。ぼくの気持を、言ってみただけだよ。そうだ、二人で海を見に行こう。南の明るく広い海を。そしてこの広い世界の中でめぐり会ったぼくたちの将来について話し合おうじゃないか」
「大賛成よ」
　一組の新鮮なカップルの間で一つの小さな約束が成立した。

B

ミーティングが終わり、男女それぞれの寝室へ引き取った。

「私、お寺の本堂へ泊まるなんて初めてなの」

「私もよ」

「広すぎて恐いわ」

「大丈夫よ。仏様が守っていてくれるもの」

「そうだったわね、こんな頼もしいガードマンはいないわ」

「でも素晴らしいじゃない。海と仏様に抱かれて眠るなんて」

「彼に抱かれて眠ったほうがいいんじゃないの」

「そりゃもちろん」

「まあ！　ご馳走さま」

同宿者の笑い声が本堂の広い闇の中に拡散した。ミーティングで彼女らはすっかり打ち解けていた。床を並べて寝(やす)んだ後も、その中の二人の間にまだ話が弾(はず)んでいた。彼女らは他の同宿者に気がねして声を抑え、

「ここで知り合ったのもなにかのご縁ね」

「本当に。そういえばあなたのご住所、私の所から近いのね」

「そうそう、歩いても何分もかからないわ。きっと駅やスーパーで顔を合わせているわよ」

「こんな偶然ってあるのね。東京へ帰ったら、遊びにいらしてくださらない？」

「私のほうへもいらして。でもあなた、看護婦さんでしょ」

「そうよ」

「看護婦さんって、寮に住んでいるんじゃなくって？」

「勤務が不規則でしょ。だから、たいてい寮に住んでいるけど、私、団体生活は息苦しくてできないのよ。だから一人でお部屋を借りてるのよ」

「その若さでえらいわね」

「ちっとも。でもお近くに住んでいるから、なにかの折りにはお役に立てるかもしれないわよ。救急車で病院をたらいまわしされそうになったら、私をおもいだしてち

ようだい。そんなことないとおもうけど」
「ううん、あなたとお知り合いになれて、とても心強いわ。私、心臓の弱い弟がいるのよ。いつ発作がおきるかわからないの。ここのところちょっとおさまっているので、久しぶりに海が見たくなって旅行に出たんだけど、留守の間に、もしも発作がおきやしないかとおもうと、せっかくの旅情にも浸りきれないのよ」
「それはいけないわね。心臓がどういうふうに弱いの？」
「心臓性の喘息なのよ。夜寝ているときに、激しい発作がおきることがあるわ。しばらく転地療養させていたんだけど、最近少し快くなったようなので、東京へ呼び戻したの」
「優しいお姉さまなのね。立ち入るようだけど旦那さまは？」
「どう見えて？」
「当然いらっしゃるんでしょう」
「ところがいないのよ。弟を放って私だけ結婚できないわ」
「あなたのようなお姉さんをもって、弟さん幸せね」
「さあ、どうかしら。私がいつも付いているものだから弟に甘えるくせがついてしまって、いつまでたっても自立できないのかもしれないわ。でもおもいきって突き放せないのね。私たち幼いころに両親を失って姉弟二人だけで生きてきたでしょ」
「それじゃあ、なおのこと弟さんがご心配ね。もし私でお役に立つことがあれば、なんでもおっしゃってね」
「なにかの折りにはぜひおねがいするわ」
そのときかたわらでもう一人の同宿者が身じろぎをする気配がしたので、二人はそれをきっかけに口を噤んだ。

C

発作は深夜におきた。激しい咳とともに、痰を吐いた。苦痛のあまり寝ていることができなくなって、床の上に坐り込んで肩で息をしながら、咳をする。応急のトローチをなめさせても、今夜はいっこうに発作は鎮まらない。鎮まるどころか、だんだん増悪してくるようである。
「ねえ、しっかりして」

姉が必死に背中をさすってやっても、弟は答えることもできない。背中を丸めて、ぜえぜえあえぎながら、痰を吐くばかりである。痰に血がまじるようになって、ピンク色を呈してきた。

弟の症状を見なれている姉には、今夜の発作は、いままでとちがうことがわかった。呼吸困難におちいり、チアノーゼが現われかけている。

「このままでは死んでしまうわ」

姉は、寝床の上で海老のように身体を丸めて、苦悶している弟を見て途方に暮れた。姉は119番をダイヤルして救急車を呼んだ。

相手は、こちらの住所と容態を聞いて、手当てをしてくれる病院を探してから行くと言ってくれた。ところがそれから十分待っても救急車は来ない。弟はもう半分死にかけているように見えた。

救急車は、出場要請をうけてから三分以内に現場に駆けつけられる配置になっている。人間が仮死状態に陥っても、三分以内に適切な救命処置を施せば助かる率が非常に高くなるのに対して、四分を過ぎると可能性は逆転して死亡する危険性が大きくなるからである。

それが十分しても救急車の気配もない。とうとう待ちかねて、再度コールすると、

「いま病院を探しているからもう少し待ってください」という答えである。

「もう少し待ってくれと言われても待てないから呼んでいるのです。弟が死んでしまいます。なんとかしてください」

「こちらも一生懸命に医者を探していますから、待ってください」

「どこの病院でもいいから連れて行ってください。おねがいします」

「そうはいかないのです。医者のいない病院へ運んで行っても仕方がないでしょう。収容する病院が決まってから救急車を出場させます」

「医者がいなければ、救急隊が見てください。とにかくなにか注射の一本でもしてもらわないと、死んでしまいます。助けてください」

「私たちは医者ではないので、手当てはできません。も

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

う間もなく行きますから辛抱してください」と言うばかりで埒があかない。

だれでも急病や怪我をしたとき救急車に乗せられて一安心するだろう。しかし、実状は救急車と病院の間に制度的な保証はない。その病院から医師不在、専門外、手不足、満床等の理由で診療を拒否されれば、救急隊は患者を無理に押しつけられない。病院から病院へとたらいまわしされている間に、救かるべき命も、手遅れになってしまうことがある。

しかし、救急を依頼する側にも大いに問題がある。医者の目から見れば少しも救急でないのが、タクシー替わりに救急車を呼びつける。いまにも死にそうなことを言うので、駆けつけてみると、妊婦が身のまわりの品を一式そろえて、どうもご苦労さまとにこにこしながら団地の階段を下りて来たりする。自分のわがままや怠慢をすべて救急に押しつける。そういう例が実に多い。

つい先日、弟が同じような発作をおこして救急車を呼び、あちこちの病院をたらいまわしされている間に発作がおさまり、救急隊員に人騒がせなと怒られたことを、姉は、おもいだした。

今夜は、前回より症状が激しい。また病院をたらいまわしされている間に、手遅れになってしまうかもしれない。途中で発作が自然におさまればおさまったで、タクシー代わりに救急車を呼びつけているように見られる。

「姉さん……、姉さ……助けて」

弟が苦しい呼吸の下からうめいた。その一瞬、ひらめいた一つの名前があった。

「そうだわ、あの人がこの近くに住んでいたわ。『なにかの折りには電話して。お役に立てるかもしれない』って、住所と電話番号をおしえてくれたっけ」

姉は窮して、すがるべき一本のわらをおもいだした。行きずりの旅行者として、交換し合った外交辞令を真にうけて頼んでも、はたして、たすけてくれるかどうかわからないが、とにかくすがってみるだけの値打ちはある。早速メモを繰って、その番号をダイヤルした。折りよく在宅していて、相手が応答した。聞きおぼえのある声のようだったが、電話を通すと、多少感じが変わってくる。確かめると、やはり対話者が、目指す相手だった。

ほっとひとまず安堵の息をついて、一別以来の挨拶もそこそこに、弟の陥っている危機を訴えた。
「それは大変ね。いいわ、私のよく知っている先生がいるのよ。私が頼めば、すぐ手当てしてくれるわ。私いまから電話しておいてあげるから、すぐそちらへ行って。いえそれより私が車でそちらへ迎えに行ってあげるわ。そのほうが早いわよ。場所をおしえて。それまで少しでも心臓の負担を少なくするために、上半身起こせたら起こしておいて」
相手はいかにもプロらしく、てきぱきと指示をあたえた。

D

低気圧が通過した後に、移動性の高気圧が張り出してきて、日本列島は昨日の春の嵐が信じられないようなポカポカ陽気になった。高気圧の裳裾は広く列島全体を被いつくし、気象台の統計値では五月下旬の馬鹿陽気になった。人々は冬将軍の最後のあがきともいえる昨日の春雪との落差の間に立たされて、季節感や服装が咄嗟に順応できず当惑している。季節の階段は、小刻みに波動しながら、寒冷の谷底から明るくまぶしい季節に向かって上っていくのであるが、今日と昨日のような落差があると、階段に断層が生じて、人々はどの季節にも属さない季節のブラックホールの中に落ち込んでしまう。
しかし若い娘たちには、そのような落差による当惑や、ブラックホールへの落穽は決してない。彼女らは、接近した明るくまぶしい季節をしっかりと見定めている。冬将軍の擬態ではないかと人々が躊躇っている前で、寒気から身を守っていた鎧のような冬の衣装をきっぱりと脱ぎ捨て、弾み立つ陽光の中に、若い肢体をおもいきり伸ばす。
この季節にこそ、裸身のもつ直截的ないやらしさや、幻滅の曲線の頽れをほどよく薄い衣に隠した、また女性本来の美しさを容赦なく殺したグロテスクな着ぶくれから解放された最も女らしい美しさが発揮されるのである。
冬の殿軍となった風も、春光の中にすっかりその牙をひそめ、花の香りを乗せて、彼女らの軽羅の裾をなぶっ

ていく。
街には、人があふれていた。寒気を避けて家の中に閉じこもっていた人々が、いっせいに陽気に浮かれ出て来たように見える。だがまだ本当の浮かれ方ではなく、いつ舞い戻って来るかわからない冬将軍の勢力に備えてのおよび腰である。若い娘たちだけがまったく無防備に現在の春光だけを信じているように、潑剌としていた。
そんな女たちを無遠慮に狙っている無機的な〝目〟があった。だがその背後には好色な野心を隠した男の目がある。
彼は、ファインダーから、最も様子のいい女を狙うと、フレームの中に捕捉してシャッターを押す。女はたちまち、構図の中の囚人として自由を奪われてしまう。
本人たちは、自分の影像が盗まれたことを知らない。自分のコピーがいつの間にか見も知らぬ人間に盗まれて、印画紙に定着され、永久に他人の恣意的な観賞に委ねられる。
カメラ男は図に乗ってますます大胆に娘たちを狙いはじめた。シャッターの音に気がついて不愉快そうに眉をひそめる者もいたが、彼はいっこうに動じない。男は、馴れている様子であった。
「失礼ね！」
ついに腹にすえかねたらしい一人が声を出して咎めた。
「これは失礼、実は私はこういう者です」
男は、女に咎められるのを待っていたように、素早い手つきで名刺を差し出した。
「あら『女性ホープ』の記者さんなのね」
名刺を見た女の態度がたちまち軟化した。「実は、私どもの雑誌に『街で見かけた素晴らしいひと』というシリーズものの企画がありましてね、あなたを撮らせてもらったのです。あらかじめおことわりをすると構えてしまわれて、自然のポーズが出なくなりますので、失礼は承知のうえで、無断で撮らせていただきました」
「それだったら、私も知ってるわ」
女の顔が輝いた。
彼女の表情には、すでにその男の無作法を咎める色はない。むしろ有名女性誌の記者の目にとまったことを喜んでいる。改めて見ると、相手は、いかにも一流週刊誌

の記者らしいシャープな風貌と敏捷な動作の持ち主であった。
「すると、私の写真が女性ホープに載るかもしれないのね」
女の面に野心が湧きかけていた。
「たくさん撮影した中から選びますからね。でもあなたでしたら、大いに可能性はありますよ」
「編集長が選ぶんですか」
「もちろん編集長も選考に加わりますけど、実際に撮影した私の意見でだいたい決まります」
彼女の胸の中で野心が速やかに成長しているのがわかる。女性ホープの「街で見かけた素晴らしいひと」の中から抜擢されて、スタータレントになった実例を知っていたからである。
「本当！　ねえ、私の写真ぜひ載せてもらいたいわ」
「あなたは、なかなかいいカメラフェースをしていますから、見込みが大いにありますよ。実は、街で見かけた素晴らしいひとは評判がよくて、女性ホープの売り物になってきたので、これまでは単に写真を掲載していたのですが、今度から、わが社で各テレビ局や、映画、レコード会社に積極的に売り込むことになったのです」
「凄いわ！　もし私、そんなになったらどうしよう」
娘は、すでに自分がスタータレントになったかのように表情を昂揚させている。
「それではお名前やご住所、ご家族のことなど資料としてうかがっておきたいのですが」
女は、素直に男の後に従いてきた。男が差し出したった一枚の名刺が描きだした栄光の虹の中に、日ごろの警戒心が麻痺していた。それはすでに狩人蜂に刺された獲物と同じであった。

E

「もしもし、こちらは、女性ホープ編集部の読者のサロン係の者ですが」
いきなり名指しでかかってきた電話に、女は咄嗟にどう対応してよいかわからなかった。もともと、彼女の住まいに電話をかけてくる者がいなかったのである。

「あなたは、先日、読者のサロンに『自由と孤独の狭間で』というテーマでご投稿なさいましたね」
電話口でうろたえている女に、相手はさらに問いかけてきた。
「ええ、しましたけど」
ようやく答えが言葉になった。
「あの投稿を拝見いたしまして、たいへん感動いたしました」
「かんどう?」
「はい、実に見事に、現代の都会生活者の心理がとらえられています。文章も構成もしっかりしていて、とても素人の方とはおもえない。失礼ですが、このようなご寄稿をされたのは初めてですか」
「初めてです」
「いや正直申し上げて驚きました。プロのエッセイストが顔色なしですよ。それで一度お目にかかって、お話ししたいのですが、これからのことにつきましてね」
「あのう、これからのことと申しますと?」
「あなたのお原稿があまり素晴らしいので、今度私どもの雑誌にレギュラーでご執筆いただこうじゃないかという話が編集部内に出ましてね。もちろん、初めに言い出したのは私ですが、それであなたとの交渉をまかせられたのです」
「あ、あ、あのレギュラーと申しますと、私が女性ホープになにか書くということでしょうか」
不覚にも声が震えてきた。
「そういうことです。これまで私どもでは執筆者に有名人ばかり起用していましたが、彼らは名前ばかりで我々を満足させてくれるようなものを書いてくれません。編集部は、読者の代表ですから、我々を満足させられない原稿は、読者も満足させられません。そのくせ原稿料だけはべらぼうに高いときている。まあこれは有名人に頼んだほうが楽で無難だという、執筆者と編集者の馴れ合いがありますが。しかしいつまでも、この馴れ合いをつづけていけば、読者は離れてしまいます。
そこであなたのような瑞々しい感覚の持ち主を読者の中から探し出し、女性ホープ独自の執筆者として育て上げようということになったのです。あなたはそのトップ

バッターに選ばれたわけです。現在のお仕事をつづけながらでもできますし、私どもの専属ライターになっていただければ、さらに有難いのです」

聞いているうちに、彼女は声だけでなく、全身が小刻みに震えてきた。集団就職で上京してから、いくつかの職場を転々と動いた後、タイプの技術を覚えて、いまの会社で朝から晩まで無味乾燥な商業文書のタイプをしている。一日の勤務が終わると、指の付け根が痛くなって、それこそ箸を握るのも億劫になる。家へ帰ってもだれも待っている者のない、GWとWCが共通の安アパートの四畳半である。だからといって一日働くと、心身ともに疲れきってどこへ行こうという気力もなくなる。たとえ行ったところで余計侘しくなるだけである。職場とアパートの往復。これが郷里にいたとき、夢にまで見た東京での生活だったのか。侘しさをまぎらすために侘しい者同士が寄り集まろうともしない。寄り集まっても一時しのぎにすぎないことを、みな知っているのだ。また一人になったときよけい侘しくみじめになることを知っていながら、初めから独りの殻に閉じこもって出て来ない。

だれにも干渉しないかわりに、だれからも干渉されない。その金属的とすらいえる東京の孤独感を、指の痛みに耐えて拙ない文章に託して、女性ホープに投稿した。どうせボツになるだろうと初めからあきらめながらも、だれかになにかを語りかけずにはいられない衝動を文章にしてみたのである。雑誌に投稿したのは、これが初めての経験である。ボツにされて元々という意識であった。それが編集部に認められた。しかもレギュラーの執筆者になってくれという。女性ホープは、日本の女性週刊誌の代表的存在である。彼女は、目の前を遮っていた厚い壁が取りはらわれて、まぶしい地平線が、視野いっぱいに開いたようにおもった。

「私、信じられないわ」

おもわず送受器につぶやいた声が、相手に届いたのか届かないのか、

「とにかく一度お会いしたいとおもいます。時間と場所をこちらにおまかせいただけると有難いのですが」

相手の言葉に、彼女はすでに無条件でうなずいていた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo